

〔研究報告〕

周術期看護に関するロールプレイ演習の学習効果

浅井 恵理 古川 直美 堀田 将士 梅津 美香 北村 直子
窪内 敏子 星野 純子 宇佐美 利佳 斉木 良美 布施 恵子

Learning Effect of the Role-playing Practice about the Perioperative Nursing

Eri Asai, Naomi Furukawa, Masashi Hotta, Mika Umezu, Naoko Kitamura,
Toshiko Kubouchi, Junko Hoshino, Rika Usami, Yoshimi Saiki and Keiko Fuse

要旨

本研究の目的は、ロールプレイ演習において学生の学習した内容を明らかにし、周術期看護に関するロールプレイ演習の学習効果を確認することである。平成24年度の成熟期看護技術演習を受講した2年次生80名のうち、研究協力に同意が得られた58名の、ロールプレイ演習後に提出されたレポートの記述内容を質的データとし、意味内容の類似性に基づいてカテゴリー化を行った。その結果、グループワークでの学習内容として【手術に向けた心身の準備に関する看護】などの15のカテゴリーが、実演の見学での学習内容として【周術期のプロセスの理解と必要な看護援助】などの10のカテゴリーが、実演での学習内容として【患者・家族と直接的に関わる際のふるまい】などの5のカテゴリーが、その他思い考えたこととして【ロールプレイ演習による学習の実感】など8のカテゴリーが抽出された。

学生は、グループワークにより、担当した1場面の周術期の理解が深まり、実演の見学によって、担当場面に限らない周術期のプロセス全体について学習していた。また、周術期の患者・家族が抱く思いについても理解し、気持ちに寄り添った、必要な看護援助、患者-看護師関係についても学んでいた。

また、実習前に本演習を設定したことで、実習で必要となる看護過程の活用方法やグループメンバー間での調整・協働の方法、今後の学習への動機づけといった、実習への準備につながったと考える。

今後の課題として、ロールプレイ実演・討議における運営方法・本演習のオリエンテーション方法や、本演習での学習がどのように実習で活かされているのかを明らかにすること、本演習を踏まえた実習指導方法の検討が必要である。

キーワード：ロールプレイ、演習、周術期看護、看護学生

I. はじめに

岐阜県立看護大学（以下、本学）では、専門科目を4つの看護学領域（地域基礎、機能、育成期、成熟期）において必修で学んでおり、1年次前期に概論、1年次後期から2年次にかけて方法論、3年次には領域別実習（以下、実習とする）、4年次には卒業研究に取り組む。

成熟期看護学領域においては領域別実習前の2年次後期に、これまでの学習内容を統合すること、さらに3年次か

ら開始される実習の準備へ円滑につなげられることを意図して、看護技術演習、看護過程演習、ロールプレイ演習から構成されている演習科目（以下、成熟期看護技術演習とする）を設定している。

成熟期看護学領域の実習では学生が周術期の患者を受け持つことが多いため、看護過程演習では周術期の事例を用いている。しかし、実習において、学生は医療処置の多さや術後の展開の速さに戸惑う状況があるため、看護過程

演習だけでなく、周術期の患者の状態を具体的にイメージしながら知識を活用して援助を実施することや、周術期の患者が辿る一般的なプロセスとそのプロセスに応じた看護援助の理解を図る演習を行う必要性が感じられた。そこで、ロールプレイ演習では看護過程演習とは異なる事例を用いていたが、平成23年度からは、看護過程演習で得た周術期の知識を活用して援助を考えることができるよう、看護過程演習と同じ周術期の事例を用いることとし、また、術前から退院前までの4場面をロールプレイ演習では設定した。藤岡ら(2000)は、シミュレーション的技法は、学生の情意、認知、技能のすべてが統合される学習の状況をつくりだすことによって「臨床知」の形成を促す、と述べている。本ロールプレイ演習においても、周術期の事例への援助を行う模擬的な経験を通じて、認知、態度、技能の統合を図り、実習前の準備ができることもねらいとした。

このようにロールプレイ演習の方法を変更したが、学習効果は確認していなかったため、周術期看護に関するロールプレイ演習の学習効果を確認し、今後の課題を明確にして改善につなげる必要があると考えた。そこで、本研究では、ロールプレイ演習後の学生のレポートの記述から、学生の学習した内容を明らかにし、周術期看護に関するロールプレイ演習の学習効果を確認することを目的とする。

II. ロールプレイ演習の概要と変更点

1. 演習科目の内容

成熟期看護技術演習(1単位30時間)は、「さまざまな健康状態で生活を営んでいる成熟期の人とその家族が、健康を維持し、また、健康障害に適応・健康障害から回復して社会的復帰や自立・自律した生活をおくるために関連のある看護技術を中心に、基本的な援助方法を演習を通じて学習する。さらに、演習を通じて、医療安全に対する看護専門職としての責任ある態度を習得する」ことを目的に、看護技術演習、看護過程演習、ロールプレイ演習の3つの演習を行う。

看護技術演習(10時間)では、気道クリーニング法、口腔ケア等6つの看護技術の演習を行い、看護過程演習(12時間)では紙上患者事例を用いたグループワークを、ロールプレイ演習ではグループワーク(4時間)と実演・全体討議(4時間)を行う。

2. ロールプレイ演習方法と変更点

平成22年度までは、術前患者、セルフケア支援が必要な慢性疾患患者、急性状態の患者、入院中の高齢者の4事例から、グループで1事例を選択し、ロールプレイ演習を行っていた。平成23年度からは、看護過程演習と同じ、大腸がんの結腸切除術の紙上患者事例を用いている。

ロールプレイ演習の方法変更に伴い、ロールプレイ演習は「周術期にある患者とその家族に必要な看護を具体的に考えることができる」ことを目標とした。実習では術後の患者に関わるが多いことから、看護過程演習では術直後の状態の看護過程を展開しているが、ロールプレイ演習では、「術前」「術直後」「術後1日目」「退院前」の4場面を設定した。

具体的には、「術前」の場面では、手術を控えた患者・家族が抱える不安を軽減し手術への準備を図る援助を考えられることをねらい、患者本人・家族を対象に術前オリエンテーションを行う実演を設定した。「術直後」の場面では、手術侵襲に伴う生体反応を捉え異常の早期発見・対応が考えられるよう、手術室から病室へ帰室した患者の状態把握及び患者の訴えに対応する実演を設定した。「術後1日目」では、術後1日目の心身の状態を捉えて合併症を予防し早期回復を図る援助を考えられるよう、術後、初めての離床の実演を設定し、「退院前」では、患者・家族の退院後の生活に必要な生活調整を踏まえ、患者・家族の生活に即した実施可能な方法とその指導を考えられるよう、患者本人・家族へ退院指導を行う実演を設定した。約80名の学生は16グループ(1グループ5名で構成)に分かれ、各場面4グループが担当し、グループワークを行った。

グループワークでは、設定場面における看護援助が必要な理由をアセスメントし、アセスメントに基づいた、具体的な計画を立案した。また、立案した看護計画の実施において必要な物品をリストアップした。教員は各グループの立案した看護計画を確認し、各場面4グループ中、1グループを看護師役、1グループを患者役として選出し、授業の最終回に15分間の実演を行った。その後、教員の進行により20分間の全体討議を行い、実演しなかったグループも実演を想定した計画立案を行っていることから、実演の見学によって自分たちの計画を振り返り、患者にとってより良い看護援助とするにはどうしたらよいか、等という視点で討議できることをねらった。平成24年度に行われたロールプレイ演

習の実演・討議内容を表1に示す。全場面の実演・討議終了後には課題レポート「ロールプレイ演習感想レポート」の用紙（A4サイズ1枚）を配布し、2週間後に提出を求めた。

3. 大腸がんの結腸切除術紙上患者事例の概要

62歳の男性で、上行結腸癌と診断され、全身麻酔下で開腹による右半結腸切除術、リンパ節郭清を受けた事例を設定した。妻は他界し、現在は独居だが、車で1時間程度のところに長男夫婦がいる。喫煙歴は32年（30～40本/日程度）であり、呼吸機能は、%肺活量90%、1秒率65.8%とした。術後の装着物は、中心静脈ライン（右鎖骨下）、末梢静脈ライン（左前腕）、酸素マスク、心電図モニター、膀胱留置カテーテル、ダグラス窩ドレーン、胃チューブ、硬膜外チューブである。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

本研究の対象は、平成24年度の成熟期看護技術演習を受講した学生80名のうち、研究同意の得られた学生のロールプレイ演習後に課した「ロールプレイ演習感想レポート」（以下、レポート）の記述内容である。レポートの項目は、「ロールプレイ演習のグループワークにより学んだこと」、「実演を見学して学んだこと」、「実演して学んだこと（実演したグループのみが回答）」、「その他思い考えたこと」である。他に、担当した場面を選択法で回答してもらった。

2. データ分析方法

レポートに記述された「学んだこと」を、学生のロールプレイ演習での学習内容として抽出し、意味内容を損ねないよう要約した。意味内容が類似するものを分類して表題をつけ、担当した場面との関連を確認した。分析作業は研究者2～3名で行い、その結果を共同研究者間で確認した。

3. 倫理的配慮

演習を受講した学生には、成績評価終了後、当該学生が集まる機会に、研究の趣旨、協力の自由、匿名性の保持等を書面及び口頭で説明し、協力を依頼した。学生には、レポートの原本と、個人情報等を消去したレポートの複写を配布した。学生によるレポート記述内容の確認後、レポートの複写の提出をもって同意とした。なお本研究は、岐阜県立看護大学研究倫理審査部会の承認を得て行った（承認番号0069、平成25年3月）。

Ⅳ. 結果

対象者80名のうち、研究の同意が得られた58名のレポートを分析対象とした。

以下、大分類は【 】, 小分類は〔 〕で表記する。

1. グループワークでの学習内容

147の記述から、49の小分類、15の大分類に整理された（表2）。〔術前オリエンテーションの目的と留意点〕等4の小分類が含まれる【手術に向けた心身の準備に関する看護】は術前の場면을担当したグループの学生のみが学習内容として挙げていた。〔術直後の患者への対応〕等5の小分類が含まれる【手術侵襲に伴う生体反応とその対応に関する看護】は術直後の場면을担当したグループの学生のみが、〔離床の援助に必要な視点〕等3の小分類が含まれる【術後の早期回復を図る看護】は術後1日目の場면을担当したグループの学生のみが学習内容として挙げていた。〔患者・家族にあわせた指導の必要性〕等8の小分類が含まれる【退院後の生活に向けた看護】は退院前の場면을担当したグループの学生のみが挙げていた。

他に、【看護過程の展開の方法】【患者の理解につながる説明・対応の必要性】【グループワークの意義】【援助の根拠を明確にすることの重要性】等が挙げられた。

表1 平成24年度に行われたロールプレイ演習の実演・討議内容

場面	実演内容	討議内容
術前	術前オリエンテーション ・手術の流れの説明 ・術後の留置物の説明	資料を用いた説明、専門用語の言い換え、患者-看護師間の適切な目線・距離感や言葉の選択といった、理解できるような説明方法の難しさと工夫について
術直後	術後の状態把握 ・バイタルサイン測定、留置・装着物の確認、状態把握	術後の患者の状態、留置・装着物について、患者が抱く思い等について、観察に加え、起こりうるリスクに対する予防的ケアについて
術後1日目	初めての離床 ・臥位から端座位・立位・歩行への援助	安全な離床、今後の離床への意欲につなげられるような関わりの工夫について
退院前	退院指導 ・退院後の食事の注意点(消化の良いものを摂取する等)について本人・家族への指導	退院後、食事に気を付けることと疾患との関連の説明の必要性、具体的な見通しが立てられるような、患者の生活に即した指導の難しさと工夫について

表2 グループワークでの学習内容

大分類	小分類	要約例(抜粋)
手術に向けた心身の準備に関する看護	術前オリエンテーションの目的と留意点	術後の見通しが持てたり、不安が解消できるよう、術前オリエンテーションを行うことが必要であると学んだ
	(指導内容を) わかりやすく伝える工夫の必要性	術前オリエンテーションでは、言葉での説明だけでなく、わかりやすいよう資料を作成したり、一緒に術後必要なケアを試したりする支援が必要だと思った
	患者・家族の情報から術前の援助を見出すこと	患者・家族の情報から術前オリエンテーションの視点や方法、術前指導の必要性を判断することについて学んだ
	手術の一般的な内容	手術に関して一般的な内容を再確認できた
手術侵襲に伴う生体反応とその対応に関する看護	術直後の患者への対応	術直後で状態の変動が大きい為、バイタルサインや創部の観察などのケアが重要だとわかった 術後の患者に精神的サポートや説明を行い、安心して術後を過ごせるようにすることが大切である
	術直後の患者への説明方法	(術後の体動については) 動けると言っても不安でわからないと思うため、実際に動いてもらって説明するとよいと思った
	術直後の観察の難しさ	術直後の患者の観察や確認が、患者に負担や苦痛を与えるのではないかと、どのように観察すべきか考えるのが難しかった
	術直後の患者の状態	術直後の状態(留置物等)について学ぶことができた
	家族へのサポートの大切さ	手術を受けた患者の家族には、不安の軽減や退院後を見通したサポートが大切だと学んだ
術後の早期回復を図る看護	離床の援助に必要な視点	離床の援助においては、今後の離床に対するイメージを作り積極性をもてるよう支援するために、患者にとって良い離床となるような環境作りが必要であるとわかった 術後1日目の痛みや身体機能に配慮したケアについて考えることができた
	早期離床の重要性	術後の早期離床は合併症予防のために重要であることを学んだ
	離床の進め方	疼痛や創部の離開等不安を抱える対象者の離床の意欲を高めるには、疼痛の緩和や不安の軽減などを行い、初回の離床をよいものにするのが重要であり、また、対象者の努力を認める声かけの仕方や頻度についても考えることが大切だと学んだ
退院後の生活に向けた看護	患者・家族にあわせた指導の必要性	退院指導では、対象者の生活背景や環境、性格などを考慮し、対象者に合った指導をすることが必要だと学んだ 術後の指導(禁煙指導、食事指導等)や家族の協力を促すことがストレスにならないよう、対象者に合った指導、家族の事情を捉えての指導をする必要がある
	(指導内容を) わかりやすく伝える工夫の必要性	退院指導では、わかりやすく、かつ漏れがないよう、様々なことに配慮して計画しなければいけないことが分かった
	退院指導における説明の難しさ	対象者の希望通りにできないことに対し、どう対応すればよいか考えるのが難しかった
	今後を見据えた看護の必要性	退院指導の目的を明確にし、目的に沿って、対象者がわかりやすく退院後に実践しやすいよう支援することが大切だと思った
	継続のための動機付け支援の大切さ	退院したら終わりではなく、対象者がセルフケアができるような教育と対象者への動機づけが大切だと思った
	退院指導に関する知識	退院指導の根拠について考えることで、疾患についてより深く学ぶことができた
	家族の協力を促す援助の必要性	(退院指導において) 家族の協力がある方がよいと判断した場合、家族間の調整を行い、家族が協力できるよう働きかけることも大切だと学んだ
	退院後の生活に視点をおいて考えることの難しさ	考えることが多くあり、大変だった 対象者が退院後の生活をイメージでき、理解できることに視点を置いて考えるのが難しかった
	看護過程の展開の方法	情報収集やアセスメントの重要性
アセスメントの方法		(現在の状態やリスクには様々な因子が関連しているため) 幅広く関連因子を捉えアセスメントすることが大切だと考えた
個別的な支援を考えることの難しさ		患者の個性やニーズに合った支援を具体的に考えることの難しさを学んだ
看護目標を明確にする必要性		(患者のニーズに応じた、具体的に効果的なケアを考える上で) 目標を明確にしてから何をすべきか考えることが大切だと思った
対象の状態や疾病について理解する必要性		対象者の状態や疾病について理解していないと(ロールプレイで行う)計画が立てられないと学んだ
看護過程演習の不足点の気づき		実演を想定して(看護過程演習で立案した)援助を再検討することで、(個別的な支援の視点で) 不足している部分に気づいた
援助内容を具体的に考える必要性	援助内容を具体的に考える必要性 ロールプレイは、具体的に援助内容を考えないと実施できないと感じた	

表2 グループワークでの学習内容（つづき）

大分類	小分類	要約例（抜粋）
患者の理解につながる説明・対応の必要性	専門用語を使わず患者の立場に立って表現する必要性	専門用語を使おうとすることがあったため、患者の立場に立って言葉を考えなければいけないと思った
	患者の質問に答えられるようにする必要性	退院指導では、対象者の疑問に答えられるよう多くの知識をもつことが大切だと感じた
	患者に説明できるようにする必要性	患者自らが理由をもって（看護師がやってほしいことを）行えるよう、根拠をもって患者に説明することが必要だと思った
	患者に理解してもらうことの大変さ・難しさ	どのようにすれば患者に理解してもらえるのか考えるのは大変だと考えた 患者に分かりやすく説明することは難しいとわかった
グループワークの意義	患者への関わりを考えることの難しさ	患者に必要な配慮など、患者への関わりを考えることの難しさを学んだ
	グループワークの進め方	グループメンバー間の意見を理解・共有するために、根拠に基づいた説明が必要であることがわかった
	グループで検討することの意義	メンバー各人の看護観や倫理観が違うように、患者への援助の考え方も違い、それゆえ、グループワークで自分の学びが深められるのではないかと考えた 自分では思い浮かばないアセスメントや援助方法があり、自分の看護ケアを考える幅が広がった
	話し合い、調整することの大切さ・大変さ	メンバー間で意見の食い違いがあったが、話し合いを重ね調整することで、看護目標を共有することができた
	グループワークにおける貢献と責任	グループワークは、役割を果たすことで貢献でき、また役割を果たさないことで迷惑がかかるため、責任があるとわかった
	グループで行うことの良さ	皆で考えると色々な考えや工夫ができ、また負担も分け合えるので、グループで行うことの大切さや良さを学ぶことができた
	看護の充実のためにもカンファレンスは大切	1人で考えていても広がらないこともグループだと広がることから、充実した看護を行うためにカンファレンスは大切だと思った
援助の根拠を明確にすることの重要性	他者との協働の方法	グループワークにより、他者を受け入れ理解すること、協働して物事をなすこと等、看護の現場で大切なことも学べた
	援助の根拠を明確にすることの重要性	看護行為には根拠があり、それに基づいた行動をとる必要があることが分かった 患者の状態を身体面・精神面・社会面からアセスメントし、根拠をもって支援できると、意味のあるケアになると思う
個別性に応じた援助の必要性と難しさ	個別性に応じた援助の必要性	対象者の性格を考えたいものを、観察や説明に取り入れるべきだと思った 個人にあわせた目標を考えることが必要だと思った
	個別的な支援を考えることの難しさ	対象者の個別性を大切に、意識して計画を作成することが難しく大変だった
アセスメント力の強化の必要性	アセスメント力の強化の必要性	看護専門職としてのアセスメントから個別的な支援を考える力をつけたいと感じた 多方面から患者を見たり、患者について考えることが自分には必要だと感じた
	知識・技術の必要性と活用	短時間で正確に（術直後の）観察を行うことが必要なため、看護職の知識・技術力が問われると感じた 知識を実際のケアに活かすことの難しさがわかり、知識は持っているだけではいけないことを学んだ
知識獲得	知識・技術の必要性	術前オリエンテーションでは、患者・家族の質問への返答ができるよう、疾患や治療についての理解を深める必要があるとわかった
	知識をケアに活用することの難しさ	アセスメントを考える過程で細かい知識を学ぶことができた
コミュニケーションの大切さ	コミュニケーションの大切さ	対象の発達段階や性格を知ることによって言葉が崩すことができるので、（性格等知る為の）普段からのコミュニケーションが大切だと思った
多職種の中での看護師の役割	多職種の中での看護師の役割	多職種の中での看護師がすべきことを考えることができた

2. 実演の見学での学習内容

167の記述から、34の小分類、10の大分類に整理された（表3）。〔周術期のプロセスすべての知識・技術を身につけておく必要性〕等9の小分類が含まれる【周術期のプロセスの理解と必要な看護援助】は、各場面を担当したグループから学習内容として挙げられていた。

他に〔患者の立場に立った分かりやすい資料・パンフレットの作成〕等6の小分類が含まれる【患者・家族の立場に立った看護援助】、〔対象者の反応を確認し、実践の評価

につなげること〕等2の小分類が含まれる【アセスメントに基づいた看護計画立案と評価の大切さ】、〔信頼関係の構築に向けた看護師の関わり〕等4の小分類が含まれる【患者との関係形成のための姿勢】等があった。

3. 実演での学習内容

27の記述から、12の小分類、5の大分類に整理された（表4）。【患者・家族と直接的に関わる際のふるまい】【患者役の経験による患者の本当の気持ちの理解】等であった。

表3 実演の見学での学習内容

大分類	小分類	要約例(抜粋)	
周術期のプロセスの理解と必要な看護援助	回復に向かって前向きに取り組める援助の工夫	疼痛や疲労など主観的な苦痛が大きい時でもあるので、表情を読み取り患者の希望ややる気を尊重しながら退院につなげていくことが大切だと学ぶことができた	
	生活改善に前向きに取り組めるような退院指導の工夫	退院に向けての指導では、患者の生活を否定しないようにしながらも改善が行えるように(改善しようという気になるように)指導することが大切だと思った	
	周術期のプロセスすべての知識・技術を身につけておく必要性	一人の患者を入院から退院まで、一貫して受け持つことがあるので、断片的な知識ではなく、流れ全てにおいての知識を身につけておく必要があることが分かった	
	周術期の各プロセスに合った必要な援助		術前オリエンテーションだけでなく、他の場面も見ることによって術前後や術後1日目、退院指導についてもイメージをつかむことができたと思う
			他の場面での学習は不十分だったので、ロールプレイを見て、看護で大切なことがいくつも学べた
			術前・術直後・術後1日目、退院指導の4つの場面を見て、Aさんの状態が回復に向かうにつれて、その時々でAさんのニーズもできることも変化していくため、それぞれの段階にあった看護ケアを行う必要があると考えた
	適切な術前オリエンテーション内容選定の大切さ	術前オリエンテーションで、私たちのグループは禁煙について重点的に行おうと思っていたが、他のグループのロールプレイを見学し、手術の直前で禁煙指導を行うより、呼吸法などを指導した方がよかったのではないかと学んだ	
	術直後における状態把握と合併症予防の重要性	術直後では患者の状態観察をすることが大切な目的であり、患者の訴えを配慮した予防ケアも行うことが大切だと分かった	
	安全確保をした上での早期離床の援助の必要性	術後1日目では、Aさんの「歩けるか」という不安を軽減し、Aさんの安全を確保した上で援助を行っていく必要があると学んだ	
	術直後、術後1日目における安全・安楽なケアの重要性		術後に患者が寒いと言っていたり、術後1日目の端座位になったときに不安定になる可能性があったりしたので、看護師は患者の安全や安楽を考えて援助することが大切であると感じた
		私たちのグループは術前だったので、手術の不安面に気をつけなければいけなかったけれど、術直後や術後1日目などは、体面や痛みなど身体的なことに気を配らなければいけないことがわかった	
患者の生活に沿った退院指導の工夫	退院指導は看護師として守って欲しい事ばかり一方的に伝えると患者も気分が落ち込んでしまうので、退院後の見通しが持てるような説明が大切だと分かった。また、Aさんの生活にそった指導となり納得してもらえるよう数回に分ける指導を行うことも技の1つだと分かった		
患者・家族の立場に立った看護援助	患者の理解状況を確認することの重要性	伝えたい事や説明を一方的にするのではなく、対象者や家族の表情を見ながら本当に理解しているのか不安な点はないかなど観察を行い、不安などを表出できる機会を与えることが必要だと思った	
	患者・家族の参加を促す工夫	ただ説明するのではなく、本人に目標を立ててもらうなどの参加型で行うことも理解を促す手段であると思った。図を用いたりするのも有効的だった	
	患者の立場に立った分かりやすい資料・パンフレットの作成		(術前は)パンフレット等、視覚的に情報を得られ、後にも見直せるものを用いる工夫が必要である
			オリの資料は看護師側ではなく、患者自身が理解できる形式(説明文や絵)でないといけないと分かった
	専門用語を使用せず、患者に分かりやすい説明をすること		術前オリエンテーションでは、患者さんが手術を理解することを目的としているため、患者さんの気持ちを考え、「分からないことすら分からない」という状況に患者さんが陥らないようにするため、専門用語をあまり使用しないことが大切であり、パンフレットに図などがあると理解しやすいと学んだ
			患者に対して説明を行う場合に、専門用語はなるべく使わず、患者に分かりやすい言葉を使用するなど、患者の立場になって支援を考えてみることの大切さを学ぶことができたので、今後の実習にも生かしていきたいと思った
	患者・家族の立場に立った対応		対象の現時点での状態を把握し、一番重要なことは何か、何が必要か診断し、対処していく事が大切だと分かった。また、その際に患者の立場に立って、どんな声かけをしたらよいか、どんなことに配慮しながら行うべきかについて学ぶことができた
			相手に伝わる様に工夫することも大切だが、患者や家族の思いを受けて説明するなど、一方的になってはいけないのだと分かった
	ひとつずつのケアに根拠をもち、患者・家族に対応すること		具体的に、いつになったら制限がなくなるか、何なら食べられるかなど、はっきり的確に根拠をもって伝えられるようにしたいと思ったし、やはり知識の深さは大切だとあらためて思った。今回のロールプレイで学んだことをぜひ3年次の実習で活用させたいと思った
			ケアや治療はどうして行われているか、目的や根拠をわかりやすく、対象にも、そしてその家族にも説明することが大切であると学んだ

表3 実演の見学での学習内容(つづき)

大分類	小分類	要約例(抜粋)
アセスメントに基づいた看護計画立案と評価の大切さ	対象者の反応を確認し、実践の評価につなげること	Aさんに分からないことがありますか?と聞くだけでなく、Aさんのやってみての感想を聞くこともAさんの理解度や自分たちの看護を評価する指標となるため大切だと思った
	アセスメントに基づいた、具体的なケアの計画	患者の意見を聞いたり、顔色を見たり、気持ちを考え、患者を尊重したケアを考えつつも看護職としてアセスメントした内容を取り入れたケアを考えていくことで、患者の安全や生命の保障をしていくことにつながると思った
不安の軽減を図る看護援助の工夫	根拠のある説明による患者の不安の軽減	看護ケアは全てにおいて意味をもつことなので、Aさんに伝わるように、なぜ?どうして?を説明することが意欲につながったり、不安の緩和につながるので重要であると気づけた
	患者・家族の不安の軽減に向けた術前の看護援助の工夫	術前には不安や疑問をなくして、納得して手術を受けられるような看護ケアが大切だと思った
	患者・家族の不安・悩みの軽減、安心に向けた看護援助の工夫	全グループの発表から共通して、患者さんやその家族へどういった説明の仕方をすれば、安心して聞いてもらう事ができるか学んだ どのグループも患者やその家族の不安や悩みをできるだけ取り除こうとしているのがわかり、細かいところまで注意を払って、ロールプレイのシナリオを考えていた
患者・家族の意向・意思を尊重したケア	患者の意向・意思を尊重したケア	Aさんの手術から退院までの看護提供のすべての中に、Aさんの意思を聞いたりなど尊重する部分のみられたので、その人その人に合ったものを提供していく上で、その人自身の体から合うと考えられるケアと、その人の気持ちを組み込んでいくことが大事だと学んだ
	看護援助と患者の意思の尊重のバランスをとることの難しさ	患者さんにとってわかりやすい言葉・表現で伝えることの難しさ、意思を尊重しつつも治療等のプランを受け入れてもらう、理解してもらうことの難しさを感じた
患者との関係形成のための姿勢	傾聴することの重要性	患者の状態をみることも重要だが、直接聞いて、患者の訴えを傾聴することもとても重要だと感じた
	患者の気持ちを考えていることを伝えること	患者の気持ちを考えていても、きちんと言葉にするなど表現しないと伝わらないと思った
	患者に関わる際の距離感、目線の高さなどへの配慮	臥床している患者の目線に合わせることで、共感が伝わり安心してもらえるように距離を近く保つことで、患者に寄り添い、患者がいつでも思いを表出しやすい状況になると思った 説明や話をする場合では、看護師と対象者との距離や目線の高さを考えることも必要だということが分かった。対象者に圧迫感を感じさせない程度の程よい位置で話をし、対象者の思いをくみ取りながら行うことが分かった
	信頼関係の構築に向けた看護師の関わり	術前オリでは患者に説明する際の看護師のふるまいが、患者と看護師間の信頼関係に影響することがわかった
個別性に合わせた看護ケアの大切さ	個別性をとらえて、患者のニーズに応じること	一般的なケアではなくAさん個別のケアを考えることが、Aさんのニーズに応えるために大切だということ学んだ
	患者の性格を考慮した援助	今回の事例では、Aさんは我慢強いということから、どのグループもAさんが気持ちを表出しやすいようにしており、患者の性格に合った看護だったと思う
家族への支援の重要性	家族に配慮する事の大切さ	本人だけでなく、家族の生活も大きく影響を受けているため、家族と話す機会がある場合は家族への配慮も大切
ロールプレイ見学による学習の拡大と実習への動機づけ	自分たちのグループにない考え・視点・工夫	自分のグループとは少し違った視点を見た。ロールプレイや自分たちのグループにはない考え、配慮・工夫があったので、とても参考になった
	それぞれのロールプレイから学んだことの、今後の実習への活用	他のグループのロールプレイを見学し、自分たちの思いつかなかったような案や援助方法を見て、学ぶことができた。特に自分の選択していない事例を見るのは、今後実習へ行ったときに役立つと思った 今回、それぞれで課題もあったので、それらをまた考えて、実習につなげたいと思った
チームケアの重要性	安全で効率的な看護を提供できるよう、人員や手順を考慮する事の大切さ	状況に応じて、看護師の人数を選択することが大切だとわかった。それは効率よく、また安全な看護の提供につながってくることもわかった
	協働における情報や看護ケアを共有することの大切さ	看護師が2人で訪室し、ケアする場面が多かったが、2人で共通理解できていないと円滑なケアは実践できないと思うので、協働するために、情報や看護ケアの共有をすることが大切だと学んだ
	チームで相談協力して、よいケアを提供する	一人では考えが固定化されてしまうから、チーム内で相談・連携し、よりよいケアを提供する必要があるのだと思った

表4 実演での学習内容

大分類	小分類	要約例(抜粋)
患者・家族と直接的に関わる際のふるまい	患者と接する時の態度の重要性	説明のわかりやすさも大切だが、目線や距離の取り方、話し方、ふるまい等、どのような態度で接するのか、ということが重要である
	患者・家族が思いや意見を表出しやすい関わりの重要性	指導の場においてゆっくりと話し、患者の発言する機会を作ることでニーズに対応することができる 家族が意見を言いやすい環境づくりに心がけたい
患者教育の声かけや説明内容・方法の工夫	患者の頑張りを認め、労う言葉かけの重要性	初回の離床時には患者の頑張りを認め、労いの言葉をかけることが大切である
	行動を抑制するネガティブな言葉でなく、ポジティブな言葉がよい	「～は控えてください」と言ってしまうがちであったが、もう少しポジティブな内容も言えるとよかった
	患者・家族に安心感を与えるために適切に説明することが重要	患者は病院という場や手術について初めて知ることが多く、戸惑うことが多いため、看護師の対応や説明は大きな意味がある 家族がチューブをみて不安を感じている際に、わかりやすい説明をされることで家族は安心できる
	患者・家族が理解できるような工夫の必要性	専門知識を持たない患者・家族に説明する時には、理解できるよう資料を用いて説明する等の工夫が必要である
	時間内で指導する工夫の必要性	限られた時間の中で指導するのは難しく、時間内で行えるよう内容や説明方法を工夫する必要性を改めて感じた
	退院指導において患者が主体となった目標設定の重要性	退院指導において患者に合った目標が立てられているのかを検討する必要がある 退院指導において患者自身が目標を考えられる方法を考える必要がある
患者役の実験による患者の本当の気持ちの理解	患者役の実験による患者の本当の気持ちの理解	留置物が多くつながれていることに対して患者だけでなく、家族も不安を感じる 実際に患者役となって気持ちを考えることは、看護師の立場で考える患者の気持ちとは異なった発見があった
看護の展開における準備・評価の重要性	看護介入の評価の重要性	看護援助には目的・目標があるため、介入後に患者に感想を尋ねたり、客観的に見て評価することが大切である
	援助を行う前の事前の予測的準備の必要性	患者の動きや変化に合わせて判断するためには、様々な状況を予測してから看護にあたる必要がある
知識習得の必要性	知識習得の必要性	患者の質問に答えるために今以上に知識を習得する必要がある

4. その他の思いや考えたこと

58の記述から、24の小分類、8の大分類に整理された(表5)。「今回の学びを今後の実習に生かすことへの思い」等の2の小分類が含まれる【今後の学習への意欲】、【看護過程の難しさの実感から生じた今後の学習への不安】、【実際の看護のイメージ化による学習の実感】等の7の小分類が含まれる【ロールプレイ演習による学習の実感】、【実際の看護の難しさの気づき】、【グループ間の負担を公平にする方法への提言】等の3の小分類が含まれる【ロールプレイ演習の方法についての提言】等であった。

V. 考察

1. 周術期看護に関するロールプレイ演習の学習効果

グループワークでの学習内容として、術前の担当グループから【手術に向けた心身の準備に関する看護】が、術直後の担当グループから【手術侵襲に伴う生体反応とその

対応に関する看護】が挙げられ、術後1日目の担当グループから【術後の早期回復を図る看護】が、退院前の担当グループから【退院後の生活に向けた看護】が挙げられていた。このように、周術期の各場面の設定時の意図とした周術期看護として考えてほしい内容が、学習内容として挙げられており、担当場面における周術期看護の学習がグループワークにより深まったと捉えられた。実演の見学での学習内容では【周術期のプロセスの理解と必要な看護援助】が挙げられたように、周術期の一連の流れ及び各プロセスに合った必要な援助の理解が深まったと捉えられた。高橋ら(2014)は、手術直後の患者の観察の演習において、模擬患者を用いた臨床で使用している物品等を用いたことは手術直後の患者のイメージ化を図ったこと、模擬患者の反応を通して麻酔や手術侵襲の影響を考えながら観察や看護実践を行う演習は、単独の技術演習よりも総合的な学習ができることを報告している。本演習の実演の見学でも、周術期の患者がた

表5 その他の思いや考えたこと

大分類	小分類	要約例(抜粋)
今後の学習への意欲	今回の学びを今後の実習に生かすことへの思い	ロールプレイから多くの学びを得ることができ、実習に生かしたいと思った
	情報収集やアセスメントの復習の必要性	情報収集やアセスメントが苦手なので、復習してできるようになりたい
看護過程の難しさの実感から生じた今後の学習への不安	看護過程の難しさの実感から生じた今後の学習への不安	看護過程が難しく、自分が今後できるようになるか不安になった
ロールプレイ演習による学習の実感	意見交換による学習の実感	ロールプレイだけでなく、さらに意見交換を行うことで、より考えが深まった
	他のグループの実演からの学習の実感	自分のグループだけでなく、他のグループが実演した援助も考え、様々な見方ができ、多くのことが学べてよかった
	グループワークによる学習の実感	今までの講義や演習での学びを統合させて考える必要があり、グループワークで確認しながら進めることで少しずつ自分の力になった
	同じ事例を用いたことによる看護過程や看護ケアに関する学習の実感	同じ事例で時間をかけて、看護過程とロールプレイを行ったことで、看護過程の考え方や看護ケアについて深く学べた
	ロールプレイでの学習の実感	ロールプレイで多くの学びがあったので、また実施したい ロールプレイなど大変だったが、実際に看護援助をよく考えることができてよかった
	実際の看護のイメージ化による学習の実感	ロールプレイで実際の看護ケアを想像することができ、実習前に様々なことが学べて良かった
	実際にケアを行う場合の患者との関わりに関する学習	実際のケアでは人と関わる上で考慮すべきことがあると思った
実際の看護の難しさの気づき	看護援助の大変さとやりがい	看護援助をするのはとても大変だが、やりがいがあると思った
	実際の看護の難しさの気づき	ロールプレイと違って実際は患者の反応に対応する必要があるのが難しいと感じた
	退院指導を行うタイミングの重要性	患者はこれまでの指導で生活の変更を伝えられていないため、元の生活に戻れるという気持ちだったので、指導を行うタイミングが大切だと思った
	患者の主体性を尊重した退院指導の必要性	退院指導を考える際に患者の意思を尊重した指導内容が考えられるとよかった
看護援助に関する学習	患者と関わる際の配慮	患者が理解しやすい説明の必要性と難しさを感じた 言葉遣いや目線を合わせて話すこと、自信につながるように話すことが大切だと感じた
	不安軽減におけるコミュニケーション・信頼関係の大切さ	対象者の不安を和らげるにはコミュニケーション・信頼関係が大きな要素であると思った
	看護場面における観察項目の多さと違い	それぞれの場面で観察すべきことが多く、また異なると思った
ロールプレイ演習の方法についての提言	グループ間の負担を公平にする方法への提言	ロールプレイの実演グループの負担が大きく、他のグループと公平でないため、全員が参加する方法で行うとよい
	実演グループを増やすことへの提言	ロールプレイの実演グループを増やし見比べられるともっと考えられると思った
	実演後の討議の工夫	ロールプレイ後の討議で否定されたように感じて悲しかった。評価される側が前向きに感想を受け取れるように工夫してほしい
演習体験で想起した感情	ロールプレイ実演後の討議での批判的意見に対する悔しさ	試行錯誤して臨んだロールプレイの実演に対して、批判的な意見を出されて悔しく、ショックを受けた
	楽しさ	楽しかった
	カテーテルのついた姿の痛々しさ	実際にカテーテルがついた姿が痛々しいと感じた
他者との意見交換の重要性への気づき	他者との意見交換の重要性への気づき	自分で考えるだけでなく他の人から意見を聞くことの大切さがわかった

どる一般的なプロセスのイメージ化が図られ、周術期に必要な看護援助の理解が深まったと考えられる。技術教育における観察遂行において、事前に関連する内容を予習することで、観察視点が明確になり、目的をもって観察できるようになると言われているが(安永, 2012)、本演習でも、事前にグループワークで関連内容を学習することにより、自分

達の考えた看護援助と関連させて実演を目的をもって見学することができたと捉えられ、実演の見学であっても学習効果が得られたと考える。

また、新田ら(2011)が、学生はロールプレイを通して患者に対する共感的理解を深め、援助的過程を含む患者-看護師関係を発展させていた、と報告しているが、実演

での看護師役が患者の心情を理解し対応しようと努めることや、その見学、実演後の全体討議で援助的に働きかけた看護師役に関わりについて話し合うことによって、実演した学生に限らず、【患者・家族の立場に立った看護援助】や【患者との関係形成のための姿勢】等、周術期の患者・家族の理解が深まり、患者-看護師関係の発展に繋がる学習ができたと考える。

周術期看護に関してだけでなく、グループワークでの学習内容として【看護過程の展開の方法】、実演の見学での学習内容として【アセスメントに基づいた看護計画立案と評価の大切さ】が挙げられていたように、看護過程の展開についても学生は学んでいた。看護過程演習では紙上患者の看護計画立案までを行うが、ロールプレイ演習と連動させることで、学生は立案した看護計画の実施に向けて、患者・家族に接することを想定して具体的に考え、実演で実施された看護計画を評価することとなり、看護過程の一連の流れを体験する機会となる。実習で必要となる看護過程の展開方法の学習が深まることは、後続する実習への準備に繋がる点からも、看護過程演習と連動させることは有効と考える。

他に、グループワークでの学習内容として【グループワークの意義】が挙げられ、実演の見学での学習内容として【チームケアの重要性】が挙げられていた。実践の場ではチームで活動することが多く、今回の演習で学んだであろうグループメンバー間での調整や協働の方法、意義についても、実習に役立てられると考える。

学生はロールプレイ演習を進める中で、知識不足を実感し、学習を深める必要性を学んでいた。一方で、実際の看護の難しさに気づき、不安を感じていた。それでも、ロールプレイ演習で学んだことを今後の実習に活かそうという意欲がみられた。実習前に本演習を設定したことで、今後の学習への動機づけといった実習への準備にも繋がったと考える。

2. ロールプレイ演習における今後の課題

ロールプレイ演習の実演・討議は、教員が進行を行っている。[グループ間の負担を公平にする方法への提言]といったロールプレイ演習方法に関する記述が得られたことから、実演・討議における教員のファシリテートの方法や、ロールプレイ演習のオリエンテーションのあり方等について、実演した学生が批判されたと思うことのないよう、学びの場とし

て、より良い看護につなげるための意見として受け止められるような運営方法の工夫等を検討する必要がある。グループ間の負担に関しては、この次の年度より、全学生の半分をロールプレイ実演グループ、残りの半分を看護過程発表グループとし、公平となるよう進めているところである。

また、ロールプレイ演習を行ったことにより、実際に3年次の実習に学習が活かされたのかは、現時点では不明であるため、ロールプレイ演習での学習がどのように実習で活かされているのかを明らかにするとともに、ロールプレイ演習を踏まえた実習指導方法の検討も、今後は必要とされると考える。

VI. まとめ

学生は、3年次の実習前の開講科目である成熟期看護技術演習においてロールプレイ演習を行うことにより、グループワークで担当した1場面に限らず、周術期全体のプロセスの理解に至っていた。また、周術期看護だけでなく、実習で必要となる看護過程、グループメンバーシップ、今後の学習の必要性といった、実習につながる学習もしていた。

今後はこの状況を踏まえ、ロールプレイ演習での学習を実際に実習に活かせるよう、支援していく必要がある。

なお、本研究は日本看護学教育学会第24回学術集会に発表したものに加筆・修正したものである。

文献

- 藤岡完治, 野村明美. (2000). わかる授業をつくる看護教育技法3 シミュレーション・体験学習(第1版)(p.6). 医学書院.
- 新田純子, 村田千代. (2011). ロールプレイを行った学生の学びの分析と今後の課題-他者理解、援助的働きかけを促進する学びをねらいとして-. 弘前学院大学看護紀要, 6, 23-36.
- 高橋甲枝, 相野さとし, 村山由起子ほか. (2014). 『手術直後の患者の観察』のシミュレーション演習の効果. 西南女学院大学紀要, 18, 45-54.
- 安永悟. (2012). 活動性を高める授業づくり-協同学習のすすめ(第1版)(p.82). 医学書院

(受稿日 平成27年8月31日)

(採用日 平成28年1月13日)

Learning Effect of the Role-playing Practice about the Perioperative Nursing

Eri Asai, Naomi Furukawa, Masashi Hotta, Mika Umezu, Naoko Kitamura,
Toshiko Kubouchi, Junko Hoshino, Rika Usami, Yoshimi Saiki and Keiko Fuse

Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

Abstract

This study aims to reveal the learned contents of the students in role-playing practice, to confirm learning effect of the role-playing practice about the perioperative nursing. Of 80 second-year students who attended a nursing skill practice for adults in 2012, 58 who provided their consent to participate were included in this study. The contents of reports submitted by the students after participating in the role-playing practice were used as qualitative data and categorized based on the similarity of semantic contents. As a result, the following categories were extracted: for learned contents through group work, 15 categories were extracted, including [nursing support on the mind and body ready for that for the surgery]; for learned contents through observation of demonstration, 10 categories were extracted, including [understanding of perioperative process and necessary nursing support]; for learned contents through demonstration, 5 categories were extracted, including [behavior when interacting directly with patients and their families]; and for feelings and thoughts, 8 categories were extracted, including [feeling of learning through role-playing practice].

Group work enhanced the students' understanding of the intraoperative period in one setting where they were assigned. Observation of demonstration allowed the students to learn the whole perioperative process without being limited to the setting to which they were assigned. In addition, the students understood the thoughts of patients and their families during the perioperative period and learned that nursing support was required to accommodate their feelings, the patient - nurse relations.

It was also thought that participating in this practice led to the following preparation for nursing practice: patient-nurse relationship, the methods of using nursing processes required in nursing practice and arranging and collaborating within group members, and motivation toward future learning.

As future issues it is necessary to clarify the management method of role-playing practice and discussion, the orientation method of this practice, and the method of learning utilization acquired through this practice. It is also necessary to examine the nursing practice method on the basis of this practice.

Key words: role playing, practice, perioperative nursing, nursing student